

四国大学紀要, (A) 48 : 83–91, 2017
Bull. Shikoku Univ. (A) 48 : 83–91, 2017

研究ノート

子育て支援領域における「困り感」に関する文献検討

永井 知子

A Review of Perceptions of Difficulties in the field of Child Care Support

Tomoko NAGAI

ABSTRACT

The purpose of this study was to review studies of perceptions of difficulties, and to associate an object and the definition of the study. Also, the study of perceptions of difficulties in the field of the child care support domain of 15 articles arranged in detail.

As a result, the research so far in the study was classified as “perceptions of difficulties of persons concerned with oneself,” which is difficult on the daily life and learning that a developmentally disabled and cause for maladjustment, and “perceptions of difficulties of problems of children” is a child’s relation to this problem. But, with an environmental change to surround a family, the family needs diversified support. When we think perceptions of difficulties of parents, who are hard to lead to support, as well as a problem in the development, it is necessary to reflect family support needs, and to think about them.

KEYWORDS : perceptions of difficulties, child care support, review

I. はじめに

近年、少子化や核家族化、女性の社会進出といった家族をとりまく環境の変化に伴い、子育てに関する悩みや不安といった複雑かつ多様な問題を抱える養育者への対応と子育て支援の重要性が指摘されている（たとえば石ら、2013など）。

厚生労働省（2016a, b）は、子育て世代包括支援センターの整備を決定し、妊娠期から子育て期の様々なニーズに対して総合的支援を提供できるよう全国展開を進めており、また、市町村の支援体制強化が明示されるなど、国や市町村による子育て家庭への切れ目ない支援が期待されている。しかし、これらの支援は養育者が自身の困り感をニーズとして発信し、助けを求めることが前提となっており、周囲が手助けの必要性を感じていても、養育者が支援に抵抗感をもっていたり、困り感がなかったりする場合支援につながらない（笠原、2000）といった課題がある。永井（2016）は、養育者がもつ支援への抵抗感や困り感のなさが、支援につながりにくい養育者の構成要素と捉え、前者の問題については援助要請（必要に応じて他者に援助を求める力）の観

点から検討し、子育て支援領域における援助要請研究の知見を整理した。後者の「困り感」については、近年注目されているトピックではあるものの、論文によってその用途は異なっており、研究領域や定義の整理等、十分でない。

本稿では、「困り感」に注目して文献研究を行い、研究対象や定義の整理を行うとともに、特に子育て支援領域（就学前の子どもをもつ養育者）における研究で扱われる「困り感」について知見を整理する。

II. 文献研究の方法

文献検索については、CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）を使用し、2017年3月10日に検索を実施した。文献の情報として、キーワードに“困り感”、“子育て／困り感”、“保育／困り感”、“保健師／困り感”を入れて文献を検索した結果、重複しているものも合わせて118件が抽出された。その中から、まず、資料や展望論文などを除いた67件を対象に、困り感に関する研究方法や内容、研究対象を整理した。次に、子育て支援領域における論文について、関連文献を加え、就学前の子どもや養育者、とりまく環境

に関する論文15件を抽出し、より詳細に内容の検討を行った。

Ⅲ. 「困り感」が扱われている研究の整理

「困り感」というキーワードが論文タイトルあるいは要約に含まれているものを抽出したところ表1のようになった。年代ごとの論文件数については、2003年以降、「困り感」というキーワードが使用されるようになってきているが、「困り感」そのものを対象にした論文は少ない。また、研究方法については、2011年ごろまで実践研究や事例報告、インタビュー調査といった質的研究が主流であったようである。2012年以降、2013年を除いて質問紙調査が多くなされるようになり、実践研究を裏付ける量的研究が模索され始めていることが窺える。研究対象については、大学生以降（成人も含む）を調査対象としているものが41件、高校生対象が重複1件、中学生対象が1件（重複1件）、小学生対象が21件（重複1件）、就学前対象が2件（重複1件）であり、大学生以降に注目した研究が多い。大学生以降に

は、大学生の他、養育者、教職員、保育者などが含まれている。

研究内容としては、障害や障害傾向、不適応から生じる日常生活や学習面での「当事者の困り感」と、教職員や保育者、養育者が特に子どものことで抱く「子どもに関する困り感」に注目しているものに分けられる。

「当事者の困り感」については、たとえば大学生を対象に、障害特性を捉えられるような質問紙調査の開発や実施を行ったもの（三谷・高橋（2016）、八木（2016）、田倉ら（2014）、山川（2012）、岩渕・高橋（2011）、山本・高橋（2009））や、中学生を対象に、「中1ギャップ」がどのような困り感から生じるかを質問紙調査で確認した中村ら（2016）のものがある。また、小学生を対象にした全ら（2014）は、子ども自身の困り感と養育者の回答を比較し、問題を多面的に捉えようとし、その他の研究としては、障害がある人の環境改善のためのニーズ把握に関する実践研究などがある（山口・加瀬、2014、伊藤・菊池、2013）。さらに、「困り感」を抱いている人への支援について実践事例もいくつか見られる。

表1. 「困り感」に関する論文の年代別件数と研究方法

| 発行年 | 件数 ¹⁾ | 研究方法 ¹⁾ | | | 調査対象者の年齢 ²⁾ | | | | |
|------|------------------|--------------------|----|----|------------------------|-----|------|-------|------|
| | | 質問紙 | 面接 | 実践 | 大学生以降 | 高校生 | 中学生 | 小学生 | 就学前 |
| 2003 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 2006 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 2007 | 4 | 1 | 0 | 3 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| 2008 | 6 | 0 | 6 | 0 | 3 | 0 | 0 | 2(1) | (1) |
| 2009 | 4 | 3 | 1 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2010 | 5 | 1 | 3 | 1 | 2 | (1) | (1) | 2 | 0 |
| 2011 | 4 | 2 | 1 | 1 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 2012 | 7 | 3 | 2 | 2 | 5 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| 2013 | 5 | 0 | 3 | 2 | 2 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| 2014 | 14 | 9 | 1 | 4 | 11 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| 2015 | 9 | 6 | 3 | 0 | 4 | 0 | 0 | 5 | 0 |
| 2016 | 7 | 5 | 1 | 1 | 5 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| 計 | 67 | 30 | 23 | 14 | 41 | (1) | 1(1) | 21(1) | 2(1) |

1) 研究方法について、質問紙：質問紙調査、面接：面接やインタビュー調査、実践：実践研究や報告、観察等とする。

2) 対象者の年齢について、() は対象者が重複しているということを意味する。

支援ニーズのある学童期の特定の子ども（あるいは少人数教室）に対する事例検討や実践研究（本間・浦崎(2014)や石川・浦崎(2014), 曾我部ら(2013), 高橋ら(2012), 本多・松崎(2008, 2010), 米内山(2008), 佐藤ら(2003))の他, 「困り感」を生じやすい大学新入生を対象にした村上ら(2014)の研究などがある。これらは, 「困り感」を確認することにより, 支援ニーズを把握し, 直接的に支援につなげることを目的とした意味合いが強いといえる。

「子どもに関する困り感」については, 教職員・保育者, 養育者の立場で研究がなされている。教職員・保育者を対象にした研究は, 『気になる子ども』への対応(発達障害の診断を受けている子ども, 傾向のある子ども), 養育者への対応, 環境(クラス編成や連携)といった3カテゴリーの研究が見られる。『気になる子ども』への対応については, 困り感の内容に関するもの(福永・古井, 2015, 佐々木・有元, 2014, 兵藤・米澤, 2013, 井上・河内山, 2012, 美馬, 2012, 小川, 2010, 吉兼・林, 2010)や, 困り感の変容プロセスに注目したもの(木曾, 2011, 2012)がある。養育者への対応については, 通園施設や医療機関・保健センターなど専門機関に通っている養育者を対象にしたもの(木村, 2016, 山原・小枝, 2014, 田中ら, 2013, 加藤, 2010)の他に, 保育現場における『気になる子ども』の養育者に関する「困り感」に注目したもの(大塚・巽(2016)や木曾(2014))がある。環境については, 田中ら(2015), 照喜名ら(2015), 藤井ら(2014abc)が教育をしていく上での物的および人的環境について困り感の実態を調査している。これらは, すべて子どもが中心となった「困り感」であり, 「困り感」をもつ人はもとより, 「困り感」の要因である子どもの支援ニーズの把握と必要な対応を目指すものといえる。

IV. 「困り感」の定義

「困り感」の定義を確認したところ, 今回対象にした論文で使用されているものは, 以下の4つであった。文部科学省の「学習面又は行動面で著しい困

難を示す」児童生徒を困り感の定義としているもの(根本・石飛, 2016)や, 佐藤(2007)を参考に「いやな思いや苦しい思いをしながらも, それを自分だけではうまく解決できず, どうしてよいかわからない状態にあるときに, 本人自身が抱く感覚のこと」を定義として使用しているもの(藤井ら, 2014abc, 米内山, 2008), それを「障害の特性から, どうしていいかわからず困っている状態」と解釈しているものもあった(尾崎ら, 2010)。また, 木曾(2011, 2012)は, 保育士を対象にした研究のなかで, 「保育士が保育上難しいと感じること, 対応に悩むこと, 負担に感じること等の感情を総じて困り感とする」と定義している。「困り感」を用いる際の定義としては, 「発達障害特性により日常生活で本人が困難を生じること」と, 「要因によらず日常生活あるいは職務において困難を生じること」の二つに分けられているといえる。

V. 子育て支援領域における「困り感」研究

子育て支援領域における「困り感」で抽出された文献および関連するものを合わせた15件について, 困り感を持っている対象, 研究の方法(調査対象者(詳細), 調査方法, 内容)ごとに整理する(以下, 15冊をA~Oで表記, 表2)。

1. 困り感を持っている対象

15件の文献のうち, 子ども自身が日常生活において困っている「当事者の困り感」を扱うものは1件のみであった(K)。養育者がもつ困り感を扱うものは3件で, 発達障害をもつ(傾向のある・気になる)子どもを育てるうえでの困り感を扱うものであった(J, L, O)。さらに, 保育者がもつ困り感については, 障害を持つ(障害傾向のある)子どもや養育者と関わる上での困り感を扱うものが11件中10件と多く(A, B, C, D, E, G, H, I, M, N), 残り1件は指導計画作成に関する困り感を扱っていた(F)。

学童期以降は, 自分でうまく適応・解決できないために生じる「当事者の困り感」を, 質問紙ややりとりの中で主観的, 客観的にアセスメントすること

表2. わが国における子育て支援領域の「困り感」を扱った研究

| 筆 者 | 発行年 | 困り感を持っている対象 子ども 養育者 保育者 | 方 法 | | 内 容 |
|-----|----------------|----------------------------|---|---------------------|--|
| | | | 調査対象者 (詳細) | 調査方法 | |
| A | 池田ら 2007 | | 保育所勤務5年以上の保育士 (124名) | 質問紙調査 | 「気になる子ども」の保育をするうえでの問題点について(選択肢および自由記述)。 ・特徴のある子どもが以前と比べて増えたかと、その理由(自由記述)。 |
| B | 小川 2010 | | 新任保育士(3名) | インタビュー調査 | ・「気になる子ども」への対応について保育で困り感を持っている内容。 ・変容の過程について。 |
| C | 吉兼・林 2010 | | 保育士(15名)、幼稚園教諭(17名) | 質問紙調査 | ・属性、発達障害特性のある子どもについて、精神的負担、バーンアウト。 |
| D | 木曾 2011 | | 保育士(5名):保育経験11年以上20 年未満2名・20年以上の者が3名、 平均保育経験は22年。 | インタビュー調査 | ・「気になる子ども」の保育における保育士の思いや困り感について。 |
| E | 木曾 2012 | | 保育士(5名):木曾(2011: 文献D)と同様。 | インタビュー調査 | ・特別な支援が必要なお子どもの保育における保育士の思いや困り感について。 ・特にこれまで担任した中で困り感を強く抱いたクラスでの経験や思いについて。 |
| F | 三好 2012 | | 保育士(136名)。 | 質問紙調査 | ・指導計画作成に関する悩みや困り感について(自由記述)。 ・記録に関する悩みや困り感について(自由記述)。 |
| G | 井上・河内山 2012 | | 障害児を受け入れている保育園・幼稚園 の保育士・幼稚園教諭(31名)。 | 質問紙調査 | ・発達障害児の特徴をもとに作成した30項目の質問(発達障害児を保育・教育 する上での不安や困りごと)。 |
| H | 美馬 2012 | | 幼稚園所属の職員(12名) | インタビュー調査 | ・「気になる子」についての認識。 ・日頃保育の中で感じる「気になる」という視点。 |
| I | 兵藤・米澤 2013 | | 保育者(2名)。 | 観察 質問紙調査 | ・子どもの自由遊びの場面で7つのカテゴリーと保育者から見た保育の困り感について。 ・子ども:年少児(23名)、年中児(29名)、年長児(18名)。計70名のうち、 男児37名、女児33名。 |
| J | 田中ら 2013 | | 発達相談センターもしくは小児 科の発達相談に初めて訪れた親 子(計153組)。 | 質問紙調査 (アンケートシート) | ・日常生活における保護者の困り感を具体的に聴取するためのいくつかの領域。 ・保護者の困り感の高い事例は保護者からの聞き取りを総合。 ・困り感の高い順に3点、背景に考えられる要因を選択形式で記録。 |
| K | 金子 2013 | ○ | 5歳児の男女(2名)。 | 事例検討 | ・保育観察記録カードに気が付いたことを全教員が記入、閲覧。 ・実践事例から、読み取り、対応の仕方、保育の在り方を振り返る。 |
| L | 山原・小枝 2014 | ○ | 発達健診および経過観察後に親 子教室に紹介された保護者(85 名)。 | 質問紙調査 | ・子どもを育てる上で育てにくいと感じること、困っていること(自由記述) ・現在の困り感レベルについて:10cmの横線を用意し、何も困っていることが ない状態を0、明日からの生活も立ち行かないほど困っている状態を10とし た場合、現在の困り感にあたる位置に線を引いてもらい、0から回答者の線 までの長さを図り、数値化。 |
| M | 木曾 2014 | | 保育所(園)において、2～5 歳児クラスの担任として働く保 育士(607名)。 | 質問紙調査 | ・発達障害傾向児の保育困難感と保護者支援困難感。 ・発達障害傾向児の保護者支援困難に関する項目。 |
| N | 大塚・巽 2016 | | 保育士経験3年以上で、「気にな る子ども」の保護者への支援 経験がある者(12名)。 | インタビュー調査 | ・「気になる子ども」を持つ保護者に直接支援を行った事例について。 ・具体的支援内容や支援がうまくいった点、うまくいかなかった点について。 |
| O | 木村 2016 | ○ | 母子通園施設を利用する保護者 (のべ40名)。 | 質問紙調査 | ・子育てに関する悩みや困ったこと(自由記述)。 |

が可能と考えられるが、乳幼児期は、子どもが自身の不適応状態をモニタリングし、気づくことは難しい。そのため、唯一、困り感をもった子どもに焦点をあてた文献(K)についても、子どもが自身で困り感を表出したわけではなく、記録をもとに保育者が子どもの困り感を明らかにしていた。また、養育者と保育者を対象にした研究については、Fを除き、子どもの発達に起因した困り感に焦点をあてていた。

2. 方法（調査対象（詳細）、調査方法、内容について）

1) 養育者のもつ「困り感」を対象にした研究

J, L, Oの3件については、発達面で気になる子どもの養育者が子育てにおける困り感について整理している。田中ら(2013)は、インテーク時の養育者の困り感の主訴は大きく『発達問題領域』、『行動問題領域』、『保護者ニーズ領域』に分けられ、子どもの年齢が0～3歳の場合は子どもの発達問題、4～6歳の場合は行動問題に強く困り感をもっているとししている。また、両年齢群に共通して「行動問題領域」のうちの「行動・感情コントロール」に関する強い困り感をもつ養育者の割合が高いものの、4～6歳代においては「対人コミュニケーション」に困り感をもつ養育者の割合が増えているという結果も示している(J)。山原・小枝(2014)は、子育てにおける困り感と困り感レベルを調査し、困り感には「自己主張が強い・指示が入らない」、「子育て環境に関すること」、「発達の遅れ」、「他児とのトラブル・集団での関わり」、「多動・衝動的に行動する」があると示している。さらに、一人っ子は第二子以降の困り感レベルと比較して有意に高くなる等、家族構成によって困り感が増幅する可能性を示している(L)。木村(2016)は、母子通園施設を利用する養育者に質問紙調査を実施し、「指示が入らない」、「多動・衝動的な行動」などが困り感として多く確認されたと示している(O)。

養育者のもつ困り感に共通するものとしては、多動や衝動性といった行動問題、コミュニケーションの問題が挙げられる。根岸ら(2014)は、養育者が

子どもの特徴や困難さに気づく内容は、年齢や発達、環境によって異なるとし、発達障害の子どもの入園後の困難さは「着席」や「友達とのトラブル」など社会性の問題が多く、集団場面特有のものであるという。多動やコミュニケーションの問題は、保育者や他児の養育者から逸脱行動として指摘を受けることも多く、養育者が子どもの問題行動を認識しやすいことから、困り感につながりやすいことが考えられる。

2) 保育者のもつ「困り感」を対象にした研究

保育者のもつ「困り感」についての研究は、子どもの保育に関する困り感、養育者対応に関する困り感、指導計画作成に関する困り感に分けられる。

子どもの保育に関する困り感については、保育という集団場面で『気になる子ども』に焦点をあてており、多くは保育者の困り感につながるような子どもの問題行動（落ち着きのなさやコミュニケーション等）を整理していた(A, G, H, I, K, M)。さらに、保育者のメンタルヘルスと困り感についてバーンアウトとの関連から検討しているもの(C)、困り感の変容プロセスを示しているもの(B, E)があり、なかには補足的に養育者との関係に関する困り感に言及しているものもあった。近年、発達障害児への支援に注目が集まるなか、保育現場での集団生活で保育者によって発達障害（傾向も含む）が発見されることも少なくない。それに伴い、『気になる子ども』の発達ニーズに合わせた保育や支援の必要性は高まっており、保育者にとって頭を悩ませる課題となっていることがうかがえる。

また、養育者対応に関する困り感については、『気になる子ども』の養育者に焦点をあて、養育者支援の際に保育者が困り感をもつ内容を整理したもの(M)、経験に基づく養育者支援の内容や保育者自身の困り感の変容プロセスを示したもの(D, N)が確認された。養育者支援が保育者にとって義務に位置づけられる一方で、関係悪化への懸念や子どもの発達に関する認識の違いなど、様々な要因により支援のあり方に迷いや葛藤をもつ人は多い。困り感という言葉では表現されていないが、『気になる子ども』の養育者支援についてはすでに多くの関心が

集まっており、今後、調査研究、実践研究ともにますます増えていくことが予想される。

保育の計画に関する実態調査を行い、指導計画作成に関する保育者の困り感を明らかにした三好（2012）は、保育の質の向上のために指導計画を養成教育や現任研修に取り入れることの必要性を挙げていた。

VI. おわりに

本稿では、「困り感」に注目して文献研究を行い、研究対象や定義の整理を行うとともに、子育て支援領域で扱われる「困り感」についての知見を整理した。それをふまえ、子育て支援領域における今後の課題について述べる。

「困り感」を主題にした論文は少ないうえ、養育者や保育者の「困り感」を対象にしたものは、発達的に『気になる子ども』の養育者に注目しているものがほとんどである。しかし、家族をとりまく環境の変化に伴い、子育ての孤立、虐待や家族の問題など、家庭支援ニーズは多様化している。支援につながりにくい養育者の「困り感」を考える際には、発達の問題だけでなく、家庭支援ニーズを反映した「困り感」を考えることが必要である。

また、「困り感」は「当事者の困り感」と「子どもに関する困り感」に分けられていた。学童期以降の先行研究や、玉木ら（2016）が指摘するような支援者と養育者の認識のずれを考慮すると、「当事者の困り感」を確認することは、支援ニーズの把握につながり、支援の可能性が広がることが示唆される。しかし、いまだ支援につながりにくい『気になる養育者』の特徴や、要因を限定しない「困り感」に注目した研究は少なく、似た概念が多くあることから、一貫した研究知見を見出すことが難しい。たとえば、「困り感」と似た「育児困難感」という概念は、井田（2013）は、「母親としての的確性に欠けるという認識に陥り、育児全般に対して自信の持てない母親自身のネガティブな感覚」とし、母親自身が自覚しているものとしている。「困り感」は母親の自信のなさのみを背景要因と捉えるわけではな

いため、「育児困難感」のようなネガティブな状態を包括する感覚として、「困り感」を捉えることができる。そこで、養育者の「困り感」を「当事者の困り感」と捉え、支援のあり方を検討するために、木曾（2011, 2012）と佐藤（2007）を参考に、「困り感」を次のように定義し、共通認識のうえでの研究の広がりや深化をめざしたいと考えている。今後、「困り感」の定義を、「子育てにおいて、困っていること、解決が難しいと感じること、対応に悩むこと、負担に感じる事等の感覚」とし、「当事者の困り感」に注目し、支援者と養育者の「気になる子ども」に限定しない「困り感」のさらなる調査研究、実践研究の蓄積が課題である。

文献

- 藤井明日香・川合紀宗・八重田 淳・落合俊郎, 2014a. 特別支援学校の就労移行支援における校内連携の課題：進路指導担当教員との連携に関する自由記述の分析から。広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要12：39－48。
- 藤井明日香・川合紀宗・落合俊郎, 2014b. 特別支援学校（知的障害）高等部進路指導担当教員の就労移行支援における困り感－法制度及び支援システムに関する自由記述から－。研究紀要60・61：95－110。
- 藤井明日香・川合紀宗・落合俊郎, 2014c. 特別支援学校（知的障害）高等部進路指導担当教員の就労移行支援に対する困り感－指導法及び教員支援に関する自由記述から－。研究紀要60・61：111－128。
- 福永 徹・古井克憲, 2015. 小学校通常の学級担任における発達障害及びその傾向のある児童の教育に対する「困り感」と校内支援体制に対する評価。和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要25：27－31。
- 本多 環・松崎博文, 2008. 「困り感」に寄り添うきめ細やかな支援。福島大学総合教育研究センター紀要4：17－24。
- 本多 環・松崎博文, 2010. 「困り感」に寄り添うきめ細やかな支援（2）。福島大学総合教育研究センター紀要8：47－54。
- 本間七瀬・浦崎 武, 2013. 高機能自閉症のある低学年男児に対する内面世界に寄り添う適応支援：通級指導教室と集団支援教室における関わりを通して。琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要（5）：41－57。
- ¹⁾ 兵藤朱實・米澤好史, 2013. 保育者の困り感からとらえた発達の課題：5歳児健診から見えてきたこと。和

- 歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要23：13-19.
- 井田歩美, 2013. わが国における「母親の育児困難感」の概念分析: Rodgers の概念分析法を用いて. ヒューマンケア研究学会誌 4 (2) : 23-30.
- ^{A)} 池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子, 2007. 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究66 (6) : 815-820.
- ^{G)} 井上和博・河内山奈央子, 2012. 発達障害児に関わる保育士・幼稚園教諭の「不安や困りごと」: 作業療法士の視点から. 鹿児島大学医学部保健学科紀要22 (1) : 31-38.
- 石川勇作・浦崎 武, 2013. 小学校の気になる子に対する支援工夫に関する実践研究: 遊びを媒介とした他者との関係性に基づく自尊感情の形成について. 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 (5) : 21-35.
- 伊藤真紀・菊池紀彦, 2013. 障害者に対する携帯型情報端末を用いた学習支援に関する研究. 三重大学教育学部研究紀要64 : 275-285.
- 岩渕未紗・高橋知音, 2011. 大学生の ADHD 困り感質問紙の作成. 信州心理臨床紀要 (10) : 13-24.
- ^{K)} 金子亜由美, 2013. 幼稚園における一人ひとりの育ちに応じた指導の在り方. 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 (12) : 29-36.
- 笠原正洋, 2000. 保育者による育児支援: 子育て家庭保護者の援助要請意識および行動から. 中村学園研究紀要32 : 51-58.
- 加藤久美, 2010. 睡眠時無呼吸症候群 (SAS) と子どもの発達の問題. 小児耳鼻咽喉科31 (3) : 209-215.
- ^{O)} 木村拓磨, 2016. 母子通園施設 A 教室を利用する保護者の困り感. 福岡女学院大学大学院紀要: 発達教育学 1 : 13-19.
- ^{D)} 木曾陽子, 2011. 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス: 保育士の語りの質的分析より. 保育学研究49 (2) : 200-211.
- ^{E)} 木曾陽子, 2012. 特別な支援が必要な子どもの保育における保育士の困り感の変容プロセス. 保育学研究50 (2) : 116-128.
- ^{M)} 木曾陽子, 2014. 保育における発達障害の傾向がある子どもとその保護者への支援の実態. 社会問題研究63 (143) : 69-82.
- 厚生労働省, 2016a. 平成27年度子育て世代包括支援センター事例集.
- 厚生労働省, 2016b. 児童福祉法等の一部を改正する法律案. 第190回国会 (常会) 提出法律案.
- ^{H)} 美馬正和, 2012. 保育者は<気になる子>をどのように語るのか. 北海道大学大学院教育学研究院紀要 (115) : 137-152.
- 三谷絵音・高橋知音, 2016. 大学生の読字・書字困難評定尺度の作成. 信州心理臨床紀要 (15) : 71-82.
- ^{F)} 三好年江, 2012. 保育所における指導計画作成に関する実態調査: 保育士へのアンケートをもとに. 新見公立大学紀要33 : 169-175.
- 村上幸人・藤田耕一・寺井由美・光森智哉・大谷修司, 2014. 宿泊合宿による「1000時間体験学修」についての新入生セミナーの実際とその成果: ビア・サポート制度の活用. 島根大学教育臨床総合研究13 : 17-31.
- 永井知子, 2016. 子育て支援領域における援助要請研究の概観と今後の課題. 四国大学紀要 (人文・社会科学編) 46 : 69-80.
- 中村・仁志・太田友子・丹 佳子・福田奈未, 2012. 「中1ギャップ」における問題と背景: 小学校から中学校への接続における生徒の困り感について. 山口県立大学学術情報 9 : 87-92.
- 根岸由紀・葉石光一・細渕富夫, 2014. 特別な支援を要する子どもを持つ保護者の気づきに関する研究. 埼玉大学紀要教育学部63 (2) : 49-59.
- 根本文雄・石飛了一・生田 茂, 2016. 初等中等教育における ICT 機器の活用の現状と課題. コンピュータ & エデュケーション 40 (0) : 38-43.
- ^{B)} 小川圭子, 2010. 「気になる子ども」の保育方法についての一考察-事例からみる新任保育者の困り感と変容過程. 幼年児童教育研究 (22) : 29-34 (38).
- ^{N)} 大塚敏子・巽 あさみ, 2016. 発達上「気になる子ども」の保護者に対する保育園の保育士の支援内容. 日本公衆衛生看護学会誌 5 (3) : 219-229.
- 尾崎祐司・井上 薫・福島直美, 2010. 「特別支援教育」になって音楽の授業はどう変わるのか (第3年次) 鑑賞活動における「困り感」をどう解消するか. 日本学校音楽教育実践学会紀要14 : 23-30.
- 佐々木まりあ・有元典文, 2014. 「困り感」のある学習環境における授業デザインの可能性: アシスタントティーチャーを活用した授業デザインの分析. 横浜国立大学教育学会研究論集 1 : 33-45.
- 佐藤 暁・築山道代・小橋 豊, 2003. 小学校において支援が必要な児童への教育的支援 (4) 算数学習に困難を示した児童への個別支援. 岡山大学教育学部研究集録122 : 89-94.
- 佐藤 暁, 2007. 自閉症児の困り感に寄り添う支援. 学習研究社.
- 石曉玲・桂田恵美子, 2013. 保育園児を持つ母親のディストレスとソーシャル・サポートとの関係-育児不安と精神的健康度に焦点を当てて. 家族心理学研究27 (1) : 44-56.
- 曾我部昌美・長尾秀夫・吉松靖文, 2013. 漢字の書字学習に困り感をもつ児童への支援の在り方: 得意な言語性能力を活かした指導実践例から. 愛媛大学教育実践

- 総合センター紀要31：119-124.
- 高橋麻衣子・巖淵 守・中邑賢龍, 2012. タブレット PC をベースにしたデジタル教科書による小学生の読解学習支援：読みパターンのログの分析から. ヒューマン情報処理112 (46)：223-227.
- 田倉さやか・福田由紀子・若山 隆・澤田佳代・佐藤智紀子・高橋 薫・藤井克美・柏倉秀克, 2014. 教職員の学生支援力向上に向けた取り組み (1)：学生の困り感に関するアセスメントツールの開発. 日本福祉大学社会福祉論集 (131)：75-85.
- 玉木千賀子・金 蘭姫, 2016. ソーシャルワークの支援を必要とする人の意向確認に関する困難：地域包括支援センターの実践に焦点をあてて. 沖縄大学地域研究 (18)：101-110.
- 田中敦士・照喜名聖実・細川 徹, 2015. 複式学級における特別支援教育の「困り感」と「よさ」：西表島の小中学校の管理職者及び八重山諸島の市町村教育委員会担当者に対する訪問調査から. 琉球大学教育学部紀要87：175-186.
- ¹⁾ 田中里実・橋本創一・松尾彩子・堂山亜希・徳増由季子・秋山千枝子, 2013. 発達や行動が気になる幼児の相談支援に関する研究：保護者の主訴・困り感からみた分析. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系64(2)：253-263.
- 照喜名聖実・田中敦士・細川 徹, 2015. 複式学級における特別支援教育の「困り感」と「よさ」：八重山教育事務所圏内の教員に対する質問紙調査から. 琉球大学教育学部紀要87：167-174.
- 八木成和, 2016. 男子大学生の大学生活への適応に関する研究－対人関係の困り感と適応感, 自尊感情との関連－. 四天王寺大学紀要 (62)：163-174.
- 山口美実・加瀬 進, 2014. 身体障害者補助犬使用者の地域生活を推進する環境づくりに関する研究：使用者が抱える「困り感」を手がかりに. 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系65 (2)：175-182.
- ¹⁾ 山原麻郁・小枝達也, 2014. 親子教室等に通う保護者の育てにくさ・困り感に関する研究. 地域学論集：鳥取大学地域学部紀要11 (1)：31-43.
- 山川京子, 2012. 子育て場面における専門機関への援助要請に及ぼす影響について大学生の発達障害的傾向による困り感に関する研究：「お困りごとチェックカテゴリー」の試作. 九州産業大学大学院臨床心理センター臨床心理学論集 (7)：29-34.
- 山本奈都実・高橋知音, 2009. 自閉症スペクトラム障害と同様の行動傾向を持つと考えられる大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発. 信州心理臨床紀要 (8)：35-45.
- 米内山康嵩, 2008. 「土曜教室」での学びを考える. 子ども発達臨床研究 (2)：61-65.
- ¹⁾ 吉兼伸子・林 隆, 2010. 特別支援教育時代における保育士の業務上の保育困難感について. 山口県立大学学術情報3：81-87.
- 全 有耳・廣畑 弘・弓削マリ子・渡邊能行, 2014. 学校保健と地域保健の連携による思春期発達障害児支援の取り組み 思春期精神保健対策の必要性. 日本公衆衛生雑誌61 (5)：212-220.
- (A)～(O)は文献研究の対象となった論文を示す)

抄 録

本稿では、「困り感」に注目して文献研究を行い、研究対象や定義の整理を行った。また、子育て支援領域（就学前の子どもをもつ養育者）における研究で扱われる「困り感」について15件の論文を詳細に整理した。その結果、これまでの「困り感」研究では、障害や不適応から生じる日常生活や学習面での「当事者の困り感」と、大人が子どものことで抱く「子どもに関する困り感」に分けられた。子育て支援領域では、養育者や保育者の「困り感」を対象にしたものは、発達の的に『気になる子ども』に注目しているものがほとんどである。しかし、家族をとりまく環境の変化に伴い、家庭支援ニーズは多様化している。支援につながりにくい養育者の「困り感」を考える際には、発達の問題だけでなく、家庭支援ニーズを反映した「困り感」を考える必要がある。

キーワード：困り感，子育て支援，文献研究